

IGSセミナー：合評会 『日本における女性と経済学 — 1910年代の黎明期から現代へ』

(北海道大学出版会、2016年)
栗田啓子・松野尾裕・生垣琴絵編著

足立真理子
お茶の水女子大学
IGS

本書の特徴(1)

日本における女性と経済学」という主題が
5つのながれによってまとめられている。

- ①女性に対する経済学教育
- ②女性によって担われた経済学研究
- ③経済学における女性労働研究の成立
- ④労働運動フェミニズムという新しい実践活動
- ⑤開発とジェンダー、および「マクロ経済のジェンダー化」

特徴(2)

- 女性によって担われてきた経済学が、家事経済学(松平友子)、家庭経済学(伊藤秋子)、「生活者の経済」学(御船美智子)と展開してきたことへの詳細な検討←本書の貢献

- 経済学史研究あるいは経済学の思想史研究に明確に位置づけようと意図している

- 「経済学という学問」の内的拡張

・ 女性が担った経済学の意義

- ・ 東京女高師からお茶の水女子大学家政学部・生活科学部が担った女性による経済学の意味とは何か？

- ・ 実質所得の重要性
- ・ 家計調査による標準生活費の産出
- ・ 生活者視点の経済循環

家計というブラックボックスの中身の可視化

1920年代に開始された 日本における女性による経済学の創成

- 松平友子
- 1925『家事経済学』
- 1934『家事経済教科書』
- 1942『同書 第5版』
 家族経済と国民経済循環図
- 1948年『家族経済学提要』
 家族経済と国民経済の循環
家計—企業(生産資本)循環として把握

- 伊藤秋子 家庭経済学
 家計の可視化、家計の経済構造把握＝家計簿による
 マクロ経済への意味の明示化
→経済学による家計のブラック・ボックス化への反証
「生活」の基盤的理解への貢献

御船美智子による「生活者の経済学」 における「家計・個計」の発見

- 1998年「女性と財産の距離と家族共同性——妻と夫の財産をめぐる構造とジェンダー・バイアス」(東京女性財団編『財産・共同性・ジェンダー——女性と財産に関する研究』)
- 財産・経済に対する妻と夫との距離の違いを問題としてあげ、「規範としての共同性」におけるジェンダー間の差異を理論に組み込

- 生命再生産の経済循環が可能な生活者の視点からの経済学へ

2000年「生活者の経済」

- 家計／個計 ——— 国民経済
- 家庭経済／個人経済——— 家庭内経済
- 家庭の生活／個人の生活——生活者の経済

- 三層で把握

- 「生活者」という自律的主体

経済学批判としての諸要素

- 家計のブラックボックス化の可視化
経済理論における個人／組織の代表単数
化の批判
世帯組織の協力的対立
世帯組織の拡張と縮小のダイナミズム

- 合理的経済人仮説への批判

生活者の経済循環(御船)

- 国家セクター
- 金融セクター(特に中央銀行)
- 足立:
国家—企業—家計の三位一体循環図への
批判か？

ジェンダー研究との関係

- 日本におけるジェンダー研究は社会学、歴史学、文学などが先行して研究を開始
- 法学、政治学が続き、経済学はなお最も閉ざされたファロクラティックな学問として存在
- 生活科学部/IGS ジェンダー研究
- 最初の統合的研究成果
「21世紀COE ジェンダー研究のフロンティア」
なお、分野的には棲み分け

フェミニスト経済学との関係

- ◆フェミニスト経済学による経済学批判
 - 合理的経済人仮説への批判
 - 世帯組織の協力的対立
 - マクロ経済のジェンダー非対称的効果
 - 資本の国際移動と労働力の国際移動

- ◆「生活者」はどのように関わるのか

「女性と経済学」の未来

- 生活者の経済学(あるいは生活経済論)とフェミニスト経済学の協同は端緒についたばかりといえる

- 経済学の一分野／経済学批判か
- 新たな経済学の生成か